

第2章 位置と環境

1 地理的環境

五條猫塚古墳がある五條市は、奈良県の南西部に位置し、大阪府・和歌山県と境を接している。大和川水系の奈良盆地とは、金剛山から南東に派生する尾根と龍門山地で区切られ、市域の北部（平成17年の市村合併前の旧五條市域）と中部（旧西吉野村域）は、紀伊山地の大台ヶ原を水源とする吉野川（河川法上の名称は「紀の川」であるが、奈良県内では吉野地域を流れるためこう呼ばれる）水系に属する。北部では、吉野川沿いに段丘面が形成され、その背後に丘陵が広がっている。一方、中部・南部（旧大塔村域）は紀伊山地の中に位置し、中部は吉野川支流の丹生川などが、また南部は熊野川水系の天ノ川・舟ノ川（十津川）などが、深い谷間を流れている。

五條猫塚古墳は、市域北部でも北方の北宇智地域に所在する。この地域は、巨視的には金剛山およびその南の中葛城山（標高937.7 m）の南東麓にあたり、起伏に富んだ丘陵と扇状地の中を、吉野川に注ぐ宇智川などの小河川が流れている。古墳は、微視的には一見して、東方の向山丘陵と西方の丘陵に挟まれた谷間の水田中に立地するが、旧地形をみると、北西から南東にのびる微高地に載っていることがわかる（京奈和自動車道の工事で地形が変貌し、わかりにくくなった）。この立地により、古墳の頂部からの眺望は限定され、北西に中葛城山を仰ぐ一方、南東方向の遠方には紀伊山地の弥山、八経ヶ岳などを望む。なお、古墳の標高は、現状の墳丘の南東裾部で約192.0 m、頂部で約197.25 mである。

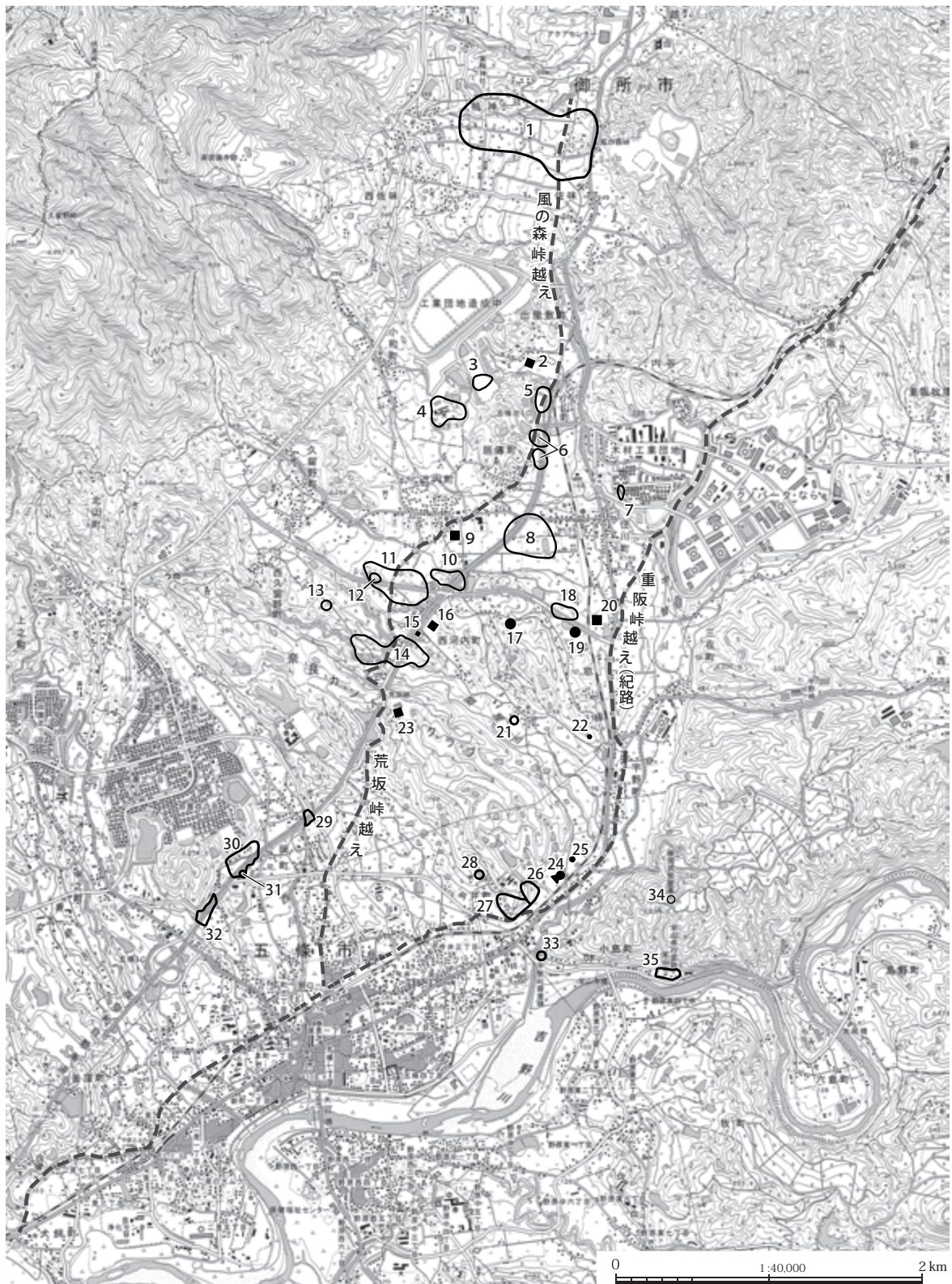
奈良盆地と吉野川の間位置する北宇智地域は、古来、交通の要衝であった。紀の川北岸を通る陸路は、現在の五條市街地付近で二手に分かれ、北宇智地域の西部・北部（荒坂峠・風の森峠越え）と東部（重阪峠越え）を経て奈良盆地南西部に入る。また、戦後、上流にダムが造られるまで吉野川の水量は豊富で、特に近世・近代は舟運も盛んであった。古代においても、水陸のルートを経由した人・物資・情報が北宇智を行き交い、当地の文化を培ったことであろう。現代は、主に国道24号・京奈和自動車道とJR和歌山線が、その役割を担っている。

2 歴史的環境

この節では、五條猫塚古墳の所在する北宇智地域を主とした市域北部の、後期旧石器時代から平安時代初期までの歴史を概観する。

後期旧石器時代 北宇智地域では未発見だが、ナイフ形石器が丘陵地の岡桐山遺跡と木ノ原花坂遺跡で出土し、吉野川沿いの上島野遺跡でも採集されている。いずれも遺構にともなわず生活の実態はわからないが、今後の資料の増加が待たれる。

縄文時代 市域では、草創期の遺跡は知られておらず、早期末～中期の滝遺跡、前期の東阿田稲口・切畑遺跡、野原遺跡がもっとも古い。中期末葉には、本格的に人々が活動していたようで、上島野遺跡で土器と石器が多数採集されている。後期前葉に東阿田稲口・切畑遺跡や野原遺跡、後期中葉には上島



- 1 鴨神遺跡 (御所市) 2 塚山古墳 3 出屋敷遺跡 4 引ノ山遺跡・引ノ山古墳群 5 居伝瓜山瓦窯跡 6 居伝遺跡 7 住川墳墓群
 8 近内尾崎遺跡 9 つじの山古墳 10 向山遺跡・向山古墳群 11 西河内吉山遺跡 12 西河内吉山古墳群 13 西久留野町海獣葡萄鏡出土地
 14 荒坂遺跡・荒坂瓦窯群 15 堂城山古墳 16 五條猫塚古墳 17 近内鐘子塚古墳 18 近内遺跡・三在西山遺跡 19 丸山古墳 20 西山古墳
 21 西河内堂田遺跡 22 勘定山古墳 23 大墓 (青墓) 古墳 24 今井1号墳 25 今井2号墳 26 今井天神山瓦窯跡 27 今井窯跡
 28 荒木神社裏山窯跡 29 岡有家遺跡 30 岡燈明田遺跡 31 岡瓦窯跡 32 岡桐山遺跡 33 宇智川磨崖碑 34 藤原武智麻呂墓 35 榮山寺

第1図 五條猫塚古墳と周辺の遺跡の位置

野遺跡でふたたび集落が形成されたとみられ、各遺跡とも良好な土器が知られる。後期末から晩期前半にかけては、中遺跡で土器埋納遺構や土器棺墓、土壇墓などが営まれた。

北宇智地域では、西河内吉山遺跡で晩期初頭の土器埋納遺構1基が検出されている。

弥生時代 吉野川沿いの段丘面では、前期の終わり頃から一部で集落が形成され始め、多くは中期に栄えた。原遺跡、滝遺跡、野原遺跡、中遺跡などが知られ、原遺跡と中遺跡では、発掘調査により円形の竪穴建物、方形周溝墓、土器棺墓などが検出されている。特に中遺跡は、竪穴建物が各所で建て替えられ、奈良盆地や紀伊北部、生駒山西麓産の土器とともに各種の石器・石製品も豊富に出土し、吉野川流域の拠点的な集落と考えられる。この中遺跡の南西方の丘陵斜面では、扁平紐式銅鐸1個が発見された（火打野銅鐸）。なお、滝遺跡でも、銅鐸の出土が伝えられている。

これらの段丘面の集落は、中期末にいったん衰退し、後期後半にふたたび形成される傾向にある。いわば空白期となる後期前半には、代わって北岸の丘陵地帯で遺跡が営まれた。中遺跡の対岸の釜窪土六堂遺跡（後期前葉～中葉）では、焼失した竪穴建物や段状遺構、溝などが検出され、いわゆる高地性集落とみられている。

北宇智地域では、前期・中期の遺構・遺物は希薄で、後期の集落関連遺跡として、標高180～250m、比高18～40mの丘陵上に、引ノ山遺跡（後期前半）、近内遺跡（後期中頃）、向山遺跡（後期後半）などが知られる。引ノ山遺跡では堆積土に炭化物を多く含む土坑、近内遺跡では隅丸方形の竪穴建物2棟と掘立柱建物2棟、向山遺跡では方形の竪穴建物7棟が、それぞれ検出されている。

後期の墳墓としては、居伝遺跡の方形周溝墓（後期末）のほか、風の森峠越えの道を見下ろす標高207m、比高40mの丘陵上に、方形台状墓の住川1号墓（後期後半～古墳時代初頭）が造られ、多孔銅鐸1点が出土している。

古墳時代 吉野川・紀の川流域には、前期古墳はほとんどみられない。これは、弥生時代以来の耕地の開拓と農業生産の発展が地理的に制約され、古墳を築造しうる地域集団が育ちにくかったことも一因であろう。

市域でもっとも古い古墳は、荒坂峠の頂上付近にある前期後半の大墓（青墓）古墳（方墳・一辺40m弱）とみられる。1921（大正10）年に地元の青年団が竪穴式石槨らしき埋葬施設を発掘し、出土した方形板革綴短甲の破片などは、帝室博物館（現在の東京国立博物館）に納められた。大墓古墳のすぐ西側の荒坂峠は、先述した風の森峠越えの道の一部であり、古墳からは北宇智地域と南方の吉野川沿いの双方を望むことができる。交通の要衝を抑え、宇智全体に睨みをきかせた立地といえる。

続く中期初頭に、大墓古墳の北東、向山丘陵の最高所に、市域で最大規模の近内鐘子塚古墳（円墳・直径85m）が築かれた。2段の墳丘の斜面に石を葺き、平坦面には円筒・朝顔形埴輪のほか、家、囲、蓋を象った埴輪も並べていたようである。埋葬施設は未調査で、粘土槨とみられているが、墳丘には結晶片岩の板石が置かれ、箱式石棺を埋めていた可能性もある。

このうち中期末にかけて、北宇智地域では、大型・中型の円墳と方墳を歴代の首長墓とする、総数100基以上の近内古墳群が造営された。首長墓と考えられる古墳は、丸山古墳（円墳・直径37m）、五條猫塚古墳（方墳・一辺25m）、塚山古墳（方墳・一辺24m）、つじの山古墳（方墳・一辺52m）、西山古墳（方墳・一辺54m）である（墳丘の規模は、現状の数値）。このうち五條猫塚古墳と塚山古墳は、

2 歴史的環境

埋葬施設が調査されている。それ以外の大型・中型古墳については、測量調査と部分的な発掘調査に留まっているが、採集された埴輪の分析も踏まえ、おおむね上述の順序で築造されたと考えられる。

五條猫塚古墳については、本書で詳述されているように、結晶片岩を積み上げた竪穴式石槨の内外から、装身具、鉄製武器・武具・農工漁具などの副葬品が多数出土した。その内容も、朝鮮半島・大陸色の濃い甲冑・帯金具・鍛冶工具、豊富な器種・形態の鉄鏃・農工具など、日本列島内外の地域や古墳との関係をうかがわせるもので、被葬者は、朝鮮半島との密接な関係のもとで渡来人とその技術を受容し、特に金属器製作・鍛冶の技術者集団を統率した、在地の有力者であったと考えられる。

後続する塚山古墳は、結晶片岩製の箱式石槨2基を直接埋めている。うち1基には、壮年男性とみられる人骨が良好な状態で残り、鉄製武器・武具・農工漁具、土錘などが納められていた。朝鮮半島からの舶載品とみられる柄穴鉄斧もあり、五條猫塚古墳と同様、渡来文化に接した被葬者の武人的な性格や漁撈との関わりをうかがわせる。

つじの山古墳は、中期の近内古墳群で最後の首長墓とみられる。周濠部分の発掘調査で、墳丘の東部に造り出しを有し、円筒・鱗付円筒・朝顔形埴輪をともなっていたことがわかった。埴輪は竈窯焼成とみられ、軟質と硬質・須恵質のものが混在する。また墳丘南側の周濠からは石見型盾形木製品も出土している。この古墳と西山古墳は、大きさがほぼ同じで、共通の設計図に基づいて造られた可能性がある。

これらの首長墓以外にも、礫槨を有する小規模な古墳や埴輪槨、特製円筒槨などの埋葬施設が向山丘陵の各所で検出されており、首長の配下の有力な構成員の墓とみられる。

このような近内古墳群の興隆の背景として、中期の中央政権による対外交渉の活発化にともない、当地の重要性が高まったことがあげられる。この時期、政権が奈良盆地南西部と紀の川河口（紀伊水門）を結ぶ交通路を整備して外交を推進し、紀伊北部を拠点とする勢力がそれに深く関与した結果、交通路上にある北宇智地域にも、渡来人と渡来文化が流入したことであろう。北宇智や葛城南部の勢力は、中央政権による対外交渉に参画・協力することで、渡来人とその最新技術を受容し、それぞれの地域を開発していったと考えられる。

近内古墳群は、中期以降に整備された重阪峠越えの道（紀路、巨勢路）と荒坂峠・風の森峠越えの道（宇智斜向道路）の双方に面し、特に後者は、風の森峠の鴨神遺跡を経て「葛城の王都」とも称される南郷遺跡群を通過する。北宇智の地域経営には南郷遺跡群を拠点とした葛城南部の勢力の関与も考えるが、古墳のあり方や水系が異なる点から、近内古墳群の造営集団については、和田萃氏が述べられるように、『日本書紀』欽明天皇条に記された内（有至）臣の祖となる在地の勢力を想定したい。

この近内古墳群から離れた場所に、市域唯一の前方後円墳である今井1号墳（全長35m）が築かれている。後円部の2基の竪穴式石槨から細線式獣帯鏡1面、玉類約500個、鉄刀2口、また前方部の蓋形埴輪の下から鉄製武器・武具などが出土した。築造時期は、五條猫塚古墳・塚山古墳より古いとされる。両古墳と同様の武人的な被葬者像をみせるが、前方後円墳であり銅鏡・玉類を副葬する点が近内古墳群とは異なっている。その立地も、紀路と吉野川北岸の接点に近い関門的な場所で紀路に面しており、中央政権からいわば在地勢力の目付役として送り込まれた人物の墓とも考えられる。

中期古墳に関する情報の多さに比べ、市域の古墳時代集落の実態はよくわかっていない。前期の遺跡としては、大墓古墳の南西900mの岡有家遺跡で、布留式期中葉の竪穴建物と掘立柱建物が検出され

ている。また、つじの山古墳の東400mの近内尾崎遺跡では、溝と流路から、庄内式新相から布留式中相にかけての土師器が出土した。中期の集落に関連する資料として、五條猫塚古墳の南東800mにある西河内堂田遺跡で、5世紀前半から中頃にかけての土師器・韓式系土器と、小型鉄製品、滑石製白玉を集積した祭祀遺構が発見された。このほか、五條猫塚古墳周辺の荒坂遺跡・向山遺跡でも、5世紀前半頃の韓式系土器が出土している。近内古墳群の造営集団の動向を知る上で、集落遺跡の調査事例の増加が期待される。

後期になると、古墳の分布は吉野川沿いに拡大する。吉野川南岸では、当地で採れる結晶片岩（緑泥片岩）を用いた横穴式石室が埋葬施設として導入され、南阿田大塚山古墳、コウモリ塚古墳、黒駒古墳などが丘陵上に単独で築かれた。これらの古墳では、紀の川下流域の岩橋千塚古墳群などに特徴的な横穴式石室の要素が部分的にみられ、紀の川を介した交流がうかがえる。一方、北岸の丘陵地帯では、木棺直葬の小規模な古墳が数基から十数基のまとまりで造られた。吉野川を挟んで古墳のあり方が異なるとともに、奈良盆地の巨勢山、葛城山麓のような大規模な群集墳がみられないことも特徴といえる。

北宇智地域ではこの時期、中期の在地勢力の衰退を反映してか、首長墓と目される大型・中型古墳はみられず、吉野川北岸と似た古墳のあり方を示す。五條猫塚古墳の周辺では、南西50mに堂城山古墳や、北方に向山古墳群、西河内吉山古墳群などが、単独または十基前後までのグループで造られている。このうち堂城山古墳は、後期初頭の一辺約10mの方墳で、2基の木棺の内外から玉類、鉄製の武器・農工具、須恵器が出土した。眼下の五條猫塚古墳と同じ方墳で墳丘の方位もほぼ一致することから、両古墳は築造年代や規模に隔たりはあるものの、間接的な系譜関係が想定されている。

また、つじの山古墳の北方の引ノ山古墳群では、中期後半から後期前半にかけて13基の木棺直葬または土器棺の古墳が造られ、後期後半には群中で唯一、花崗岩の横穴式石室を有する円墳が造られた。

飛鳥時代中頃には、結晶片岩の横穴式石槨を有する勘定山古墳が向山丘陵の南端部に築かれ、市域での古墳の築造が終了する。

なお、大墓古墳がある丘陵の南端部、通称天神山丘陵では、大和地域でもっとも早い古墳時代後期初めから須恵器の生産が始まり、今井窯や荒木神社裏山窯が奈良時代前半にかけて操業を続けた。飛鳥・奈良時代に当地が一大瓦生産地帯になる先駆けと位置づけられる。

飛鳥・奈良時代 市域の北部は、古代の宇智郡域にほぼ相当する。『倭名類聚抄』には同郡の郷として阿随、賀美、那珂、資母の四つの名がみえ、4郷は吉野川とその支流を境に区切られ、上流から下流に向かって順に名付けられたようである。また条里制の施行にともない、宇智郡では奈良盆地の体系から独立して、地形に合わせた方格地割が各所で設定されたとみられている。郡家は未発見だが、その所在地は、宇智神社・荒木神社（いずれも延喜式内社）が鎮座し、先述の今井窯・荒木神社裏山窯を含む須恵器・瓦の窯が設けられた、通称天神山丘陵の西方の地域と想定される。

飛鳥・奈良時代の宇智郡では、須恵器とともに瓦も盛んに生産され、吉野川北岸の今井天神山、岡、荒坂、西山、居伝、居伝瓜山、南岸の牧代など、瓦専用や瓦陶兼業の窯が、丘陵地や小河川の斜面を利用して多数築かれた。瓦の供給先は、奥山廃寺や川原寺、本薬師寺、藤原宮など飛鳥方面が中心で、中央の有力氏族や大王（天皇）家により郡内の屯倉や瓦窯の開発・管理がおこなわれたとみられている。

この瓦の生産量に反して、飛鳥時代の寺院は現段階ではみられず、奈良時代創建と伝える榮山寺と平

2 歴史的環境

安時代初期の靈安寺が知られる程度である。飛鳥の政治権力による直轄的な地域経営下にあった当地では、在地勢力や渡来系氏族による氏寺建立の動きが鈍かったのであろう。

寺院に比べて顕著にみられるのが、火葬墓を主とした墳墓である。市域では、山代忌寸真作墓誌や楊貴氏墓誌の出土が知られ、榮山寺の裏山の頂には藤原武智麻呂墓がある。また『延喜式』には、藤原良継の「阿陶墓」と藤原武智麻呂の「後阿陶墓」が宇智郡阿陶の地にあると記されている。奈良時代の皇族、貴族、官人、僧侶などの墳墓の多くが、平城宮の北方や奈良盆地の周囲の丘陵地・山間部に営まれるとされ、宇智郡域もそのような墳墓の集中する「公葬地」の一つであったとみられる。

北宇智地域は、吉野川を南縁、その支流の宇智川を東縁、別の支流の落合川（現在の奈良と和歌山の県境を流れる川）を西縁としたであろう、賀美郷の北東部に位置する。条里制の地割の名残は、向山丘陵北方の扇状地とその東方の宇智川沿いにみられる。

窯業生産に関する遺跡としては、荒坂（須恵器・瓦）、三在西山（瓦）、居伝（瓦）、居伝瓜山（瓦）などの窯跡がある。荒坂瓦窯群は、7世紀後半創建の川原寺の瓦を焼成した窯として知られ、10基以上の窖窯（有段登窯）が関屋川に面して築かれている。瓦窯群東方の丘陵上では、同時期の工房・住居とみられる建物遺構が検出された。また居伝瓜山窯跡は、風の森峠越えの道に面し、有牀式の平窯1基が検出されたが、8世紀中頃とみられる瓦の供給先は不明である。

墳墓は、出屋敷遺跡で奈良時代中頃から後半にかけての火葬墓2基が検出され、いずれにも鉄板が1枚ずつ納められていた。このほか、西久留野町で海獣葡萄鏡、居伝瓜山窯跡周辺で銅製腰帶具（巡方・丸軛）が出土し、それぞれ付近の丘陵地に墳墓が造られていた可能性がある。（前坂尚志）

<参考文献>

- 秋山日出雄 1975 「日本古代の道路と一步の制」『橿原考古学研究所論集』第3 吉川弘文館 pp.543-582
- 泉森 皎 1987 「大和の「須恵」と窯跡群」『文化史論叢 横田健一先生古稀記念』上 創元社 pp.525-543
- 岡崎晋明・川上洋一・吉村和昭 1993 『吉野・紀ノ川悠久の流れ 古代・大和と紀伊の文化交流』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第41冊 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 大西貴夫(編) 2009 『吉野川紀行—吉野・宇智をめぐる交流と信仰—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第71冊 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 神庭 滋 2005 「近内古墳群と葛城」『かつらぎ 葛城市歴史博物館年報・紀要』4 pp.45-57
- 神庭 滋 2012 『忍海と葛城—渡来人の歩んだ道—』葛城市歴史博物館特別展図録第13冊 葛城市歴史博物館
- 坂 靖 1991 『近内古墳群』奈良県文化財調査報告書第62集 奈良県立橿原考古学研究所
- 坂 靖・青柳泰介 2011 『葛城の王都・南郷遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」079 新泉社
- 福永信雄・前坂尚志(編) 2004 『市立五條文化博物館資料目録I—堤昭二氏収集考古資料を中心に—』市立五條文化博物館
- 前坂尚志 2001 「9. 五條地域」『大和前方後円墳集成』橿原考古学研究所研究成果第4冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.350-355
- 前坂尚志(編) 2012 『五條の歴史と文化』市立五條文化博物館常設展示図録(第3版) 五條市教育委員会
- 和田 萃 1979 「紀路と曾我川—建内宿禰後裔同族系譜の成立基盤—」『古代の地方史』第3巻畿内編 朝倉書店 pp.122-150

※個別の遺跡の文献については、紙幅の都合上、割愛した。詳細は、「大西編 2009」をご参照いただきたい。

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日 2014（平成26）年3月31日

発行 奈良国立博物館
〒630-8213 奈良市登大路町50番地
TEL 0742-22-7771

印刷 株式会社 天理時報社
〒632-0083 天理市稲葉町80番地